

## 美術の窓(92)

没後30年記念  
矢代幸雄の『歎美抄』

大和文華館館長 水田 徹

本年5月25日は私ども大和文華館の初代館長矢代幸雄の三十回忌にあたります。初代館長の功績についてはこれまでもご紹介して参りましたが、今回は氏の名著『歎美抄』の中から一編を選び、改めて矢代幸雄の芸術観を噛み締めてみたいと存じます。

『歎美抄』は矢代幸雄が自ら監修した美術雑誌『大和文華』に、昭和26年3月の創刊以来折々に書き綴った美術随想で、特に昭和45年に全21編が一冊の単行本(鹿島研究所出版会刊)にまとめられて以来、その圧倒的な博識と文章力、真摯な作品観察、鋭い鑑識眼が多くの美術ファンを魅了し、いつしか『歎美抄』は矢代幸雄の代名詞のようになりました。

今回取り上げるのは、本館所蔵の重要文化財「笠置曼荼羅図」を論じたもので(前掲誌2号、昭和26年5月刊)、随想とは申せ14頁に及ぶ長編で、いまなお笠置曼荼羅研究の基本文献の一つに数えられます。なお論はこの作品に対する異なる解釈に反論する形で展開しますが、本稿では紙幅の関係からその点には一切立ち入りませんのでご了承下さい。また『大和文華』103号には本館の元館次長成瀬不二雄氏による興味深い笠置曼荼羅図論が掲載されています。合わせてご参照下さい。

さて、京都府相楽郡の木津川沿いに屹立する笠置山は古来神山として崇められ、天智天皇の御子大友皇子の発願で山頂近くの巨岩に化人の助けを借りて(『今昔物語』卷十一)弥勒磨崖仏が彫られて以来、弥勒仏信仰の聖地となります。そして弥勒信仰が高まる鎌倉時代

初頭に、興福寺の僧貞慶によって磨崖の正面に礼堂、左右に十三重塔や経蔵などが整備されますが、残念ながら1331年、元弘の乱でこれらの堂塔は灰燼に帰し、その炎を浴びたので、目の前に聳える磨崖の弥勒像もすっかり焼け落ちてしまいました。

ところが矢代論文は、この戦禍以前の笠置の全容を「笠置曼荼羅図」(図1)の中に読み取ろうとするのです。論は笠置寺を現地調査することに始まり、文献及び他の図像集を検討しつつ、作品そのものを深く観察・観賞することで終わります。

現在の笠置寺磨崖弥勒石は陰刻された山型光背の上半分ほどを残すのみで、弥勒像そのものは跡形もなく失せ、また磨崖の前は正月堂と呼ばれる江戸時代の小さな堂宇が建っているに過ぎません。しかし磨崖の高さと堂宇との間隔、

(図1)



そして木津川に落ち込む断崖を背に櫓を組んで建つ堂宇の建築構造は「笠置曼荼羅図」に共通しており、画家は現にこの地に立ち、現地の地形を忠実に再現している、と矢代幸雄は実感します。磨崖のすぐ前に描かれた灯籠も、左手に立つ十三重塔も今は失われていますが、それを載せた岩と塔への石段はほぼ図柄通りの位置に残っているのも、氏は見逃しません。

次いで矢代幸雄は磨崖弥勒像そのものについて、同像を描いた図像集の中から鎌倉初期の『覚禅鈔』卷十一の図(図2)に着目します。平安時代に描かれた同主題図と違って、弥勒像の台座が左右の足を別々に蓮華座に載せる、いわゆる踏割蓮華座形式になり、大腿部を覆う衣の裳が両脚を透かせてみせるなど、細部描写が「笠置曼荼羅図」の弥勒像と共通している点に注目し、両図いずれもが火災前の弥勒像を忠実に写したものと推論します。

なお『覚禅鈔』の図は弥勒の向かって右の柄香炉を奉持する比丘の姿は描いていません。氏はこれを岩石の重なりを描きすぎて比丘を入れる余地がなくなったためであろうとしますが、この異同は画家の立つ位置の違いに起因するとも考えられます。すなわち大和文華館本では弥勒を包む光背の向かって右側の輪郭のみ二重に描いて窪みを表し、衣の袖も裾もそちら側

(図2)



だけ光背に重なっており、これは明らかに弥勒像を正面やや左手前から眺めた図です。

一方『覚禅鈔』の図は光背全体を二重線で示してはいますが、弥勒の右手と袖は光背の向かって左に大きくはみ出しており、画家の視点がかなり右手前側、件の比丘が岩陰に隠れる程の位置にあったことを物語っています。断崖との間の狭い空間を右へ左へと移動する画家の姿が目には浮ぶようです。両図とも現地を写実描写したものとすらすら矢代幸雄の指摘はまことに当を得ていると申せましょう。

むろん氏も「笠置曼荼羅図」を現代的な意味での自然描写と断じているわけではありません。礼堂の屋根の上に石仏の全貌を見ることは地形からいって不可能であり、この鳥瞰図的な構図は、本尊としての弥勒像の巨大さと立派さを印象づけるが為の芸術的作画に他ならない。しかしだからといってこの絵の近代的風景画としての性格は失われるものではないと記します。

そして最後に氏は「笠置曼荼羅図」の弥勒像そのものは「荘重な立体感と豊満のうちに豪毅を蔵する奈良朝の石仏を忠実に丁寧に写したとしなければ説明がつかない」とし、本作品が世界的名画と評されるのは、その近代的写実性に併せて「画中の本尊たる石仏が奈良朝の偉容を以って深き印象を観者の心の上に残すためである」と結論づけます。

「笠置曼荼羅図」がまだ原三溪翁の手元にあった折、原家に招かれこの絵の前に座ると奈良へ行った気分になったと矢代幸雄は述懐しています。氏が随想「奈良彫刻思慕」を著したのは丁度その頃のことです(『人文』1巻11号、大正5年)。それから30余年、請われて大和文華館設立の準備に入り、三溪愛蔵品の幾点かを譲り受けることになったとき、矢代幸雄がそのリストの中に「笠置曼荼羅図」を加えたことは言うまでもありません。

季刊 美のたより No.150

平成17年4月1日

発行 大和文華館